
哲と学の幸せ問答

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哲と学の幸せ問答

【Nコード】

N1420G

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

幸せな人と不幸せな人について語り合う、哲君と学君のお話。（主に哲君の視点で書かれています）

不幸好きの学君

「ねえ、哲。世の中には何故不幸な人間と幸せな人間が居るか知ってる？」

「わかんねえよ。でも俺は自分のこと幸せだっと思うようにしてるよ。だから多分俺は幸せだと思うよ」

「そっか。哲は今自分のこと幸せだと思っようにしてるってことはさ、本当は幸せじゃない部分があるってことだよな？それってさ、やっぱり不幸なんじゃない？」

「でもさ、そんなこと言ったらみんな不幸じゃないの？誰だっさ、そういう部分ってあるじゃん」

「そうなんだ。誰だっさそういう部分はあるんだよな。だから皆幸せな振りをしているのかな？」

「いや、それは違うと思うよ。実際不幸を抱えていたとしても、やっぱり幸せだっと思う瞬間はあるじゃん？そういうことに焦点を当てて生活しているから、自分は幸せだっと思えるんじゃないかな？」

「なるほど。でもさ、やっぱり不幸なんだよね。どこかしらやっぱり不幸を持っているんだよな？」

「学君も随分しつこいね。そんなに不幸が好きなのか？そんなに不幸ばかり気にしてるのかい？」

「うん、僕は潔癖症なんだ。自分の人生に対して」

「ふーん。悪趣味だね。俺はそんなことどうでもいいよ。そんなことより友達とワイワイやってる方がいいや。そっちの方が楽しいもんねー！」

「…。僕は哲がそういう風に出来るのが羨ましい。哲がそういう風にワイワイやっっているのを見ると、何故か僕は取り残されてしまった気分になるんだ。何故なんだろう？」

「だって、そりゃ不幸ばっかり見つめている学君みたいなのと一緒にワイワイできないじゃん。そりゃ学君とは遊びたくないよ。だっ

て楽しくないんだもん。ほら、そんな話しないで早くこっちへ来なよ」

「…。『うん！』って言って、今すぐ君の元へ飛んでいきたいよ。だけど何故か違和感があるんだ。哲達と一緒に遊んでいると違和感があるんだ。何か違う、何か違うって。僕が欲しいのはそういうのじゃないんだよ」

「何なんだよ、学君も本当にしつこいよな。何が欲しいんだよ？みんなでワイワイしてりやそれでいいじゃないか？“自分を忘れて”ワイワイすりゃいいんだよ。そんなに自分が可哀想なのかい？本当は自分が可愛くて仕方ないんでしょ？そんな可哀想な自分が！！ホント悪趣味だよ、全く」

「そんなこと言わないでよ」

「もう学君、嫌い！じゃあね、バイバイ！」

「哲…。待つてよ、行かないでよ、僕を置いていかないでよ！！」

「さよならー！イエーイ！！」

学君と先生達

哲君と別れた学君は、不幸と向き合い毎日せつせと悪趣味な日課を続けています。

毎日、何が悪いのかそればかり気にして過ごしています。

幸せを追求するよりも、不幸を追究しようとするのです。

学君のおじいさんはいつもそんな彼のが心配で、遠目から「大丈夫かな、学は？」と目を光らせて見守っています。

また、学君の先生もそんな彼のが心配で「もつと遊べばいいのに。学君はいつも勉強ばかりしてるな」と頭を掻いています。

学君は学校来ると、毎朝鳥小屋の鳩達にエサをやり、昼休みは校庭の石拾いをして、子供達が遊びまわっている校庭の片隅に集めた石を捨てて、そして教室に戻ってきます。

そして女の子達が談笑している脇で、難しそうな顔をして本を開き読んでいます。

担任の先生が校長先生にそんな学君の様子を報告しました。

校長先生はその話を聞いて、子供らしくない子供だなと思いました
が、学君が他の子達とは異なる個性を持っていることに気付きました。

彼の為に何か私にできることは無いだろうか？と思いました。

「やあ学君、何の本を読んでいるんだい？」

「…あ、校長先生。僕を読んでいる本ですか？」

「うん、そうだ。先生も本を読むのは好きなんだ」

「僕を読んでいる本は『不幸の克服』です」

「…どこでそんな本見つけてきたんだい？うちの学校の図書館にあつたっけな？」

「いえ、僕の親戚の人が書いた本です」

「へえ、親戚の人は作家なのかい？」

「いえ、趣味で書いたと言っていました」

「…。それ、どんな本なの？内容は？」

「最初の章では不幸の事例が沢山載ってます。次の章には不幸の克服について書いてあります。最後の章には幸せについて沢山書いてあります」

「なるほど…。親戚の人は随分沢山の不幸を知っているんだねえ」

「はい。でも先生、この本お父さんとお母さんも読んでただけど、珈琲こぼしちゃって、第二章だけ読めなくなっちゃってるんです。だから不幸の事例と幸せについてしか僕には読めないんです」

「なるほど。じゃあ克服方法が分からないんだね」

「そうなんですよ。第三章を読むのはとっても面白いんですけど、第一章から第三章へどうやって話が繋がっているかだけ分からないんです」

「んー、そうか。じゃあ先生が教えてあげようか？」

「ホントですか！？いやぁ嬉しいです、ありがとうございます」

校長先生は学君を見て、随分変わった子だなと思いました。

そして学君の親戚もよっぽど変わった人なんだなと思いました。

また自分自身、不幸の克服方法について教えてあげると学君に言いましたが、校長先生自身もその方法が分からないということに気がつきました。

「不幸の克服方法か…。そんなの分かってりゃ、俺も苦労して無いよな」

校長先生は学君と別れて、校長室で煙草を吸いながら、そんな独り言を呟いていました。

校長先生と子供達

学君の担任から校長先生にまた報告がありました。

「校長先生、花子ちゃんが市の美術展で金賞取りましたよ！」

「おおそうかそうかー、じゃあ賞状作らないとなあ」

「ええ、今度の全校朝会で表彰してあげて下さいね！」

「ふむ。分かった」

学君の同じクラスの花子ちゃんが市の美術展で金賞を取ったらしいので、校長先生は賞状を作らないとならないのです。

校長先生は自分の仕事の花子ちゃんの賞状を作る時間に割かなければならないので、急いで仕事を終わらせなければと思いました。

次の日、再び学君の担任から報告がありました。

「校長先生、悪男君が大変なことをしてしまいました。友達と喧嘩をして友達の頭を窓ガラスに無理やり叩き付けたそうです。友達君は頭から血が出ました！」

「なにい?? 友達君は大丈夫かね!??」

「先ほど救急車が駆けつけ、友達君は一命を取り留めました。私も応急処置を保健室の先生としましたが、頭パツクリでした」

「むむむ…、親御さんには連絡したのか？」

「いえ、まだです。そんな余裕がありませんでした」

「今すぐ友達君の親御さんに連絡しなさい！」

「はいっ！分かりました!!」

「私は悪男君の所に行ってくるから、君はホームルームが終わり次第、友達君の所へ行きなさい」

「はい!!」

校長先生は友達君のことが心配でした。
しかし同時に悪男君のことも心配でした。

「おい、悪男！」

「……」

悪男君は校長先生を睨んでいます。

「悪男！大丈夫か？どうした？」

「校長先生……俺、あいつがふざけて俺を馬鹿にして笑うから、キレちゃった」

「友達君のことか??」

「はい。マジあいつムカつく」

「ムカつくとは何だ！おまえは大変なことをしたんだぞ」
「……」

悪男君は自分は間違っていない、自分は正しい、ずっとそう思っています。

校長先生はそれを見抜いていました。

「悪男君、君は友達君が何故馬鹿にしていると思ったんだ？」

「だってあいついつも俺のこと馬鹿にしてんだぜ？みんなも知ってるよ」

友達君はいつもニコニコ笑っていて、みんなのいじられ役。
友達君の周りにはいつも沢山の人で一杯でした。

「悪男君、君は本当に馬鹿にされていたのか？」

「はあ？だから俺キレちゃったんすよ。馬鹿にするのもいい加減に

しろ！って思いましたよ」

「…。君は馬鹿にされるのがそんなに嫌なのかい？」

「…。馬鹿にされて嬉しい奴なんて居ないだろう、校長先生何変なこと言ってるんだよ」

校長先生は思いました。

悪男君と友達君は正反對なのです。

悪男君は硬派で笑う事無く、いつも真面目に相手と向き合っています。

しかし友達君はいつも笑っていて、他人を小馬鹿にしている様に悪男君には見えたのです。

「確かに友達君は馬鹿にしているかもしれない。しかし、友達君は馬鹿にされることが嫌いではないんだよ」

「…。」

「いや、友達君は馬鹿にされるのは本当は嫌いなものかもしれない。だけど友達君は馬鹿にされても自分を信じているから、決してそんなことでは自分の姿勢を崩しはしないんだ」

「俺、ヘラヘラ笑っている奴が嫌いなんだよね。それで幸せそうで、皆に人気者な友達君みたいなのが嫌いなんだよね」

「…。いいや悪男君、君にも他人には真似できないほどの素晴らしい個性がある。それは君が他人と真面目に向き合おう努力することが出来るということだ。しかし君はこれからはもっと自分と向き合った方がいい。いいかい？自分の内面をもっと大切にしなければ悪い男だと言われちゃうからね。もう一度言う。外面を大切にすると、即ち他人と向き合うことも大切だ。しかし君はもう少し内面と向き合った方がいい。それが他人の内面と向き合うことに繋がるんだ」

「うるせえ、くそじじい。俺はどうせ悪い奴なんだ。みんなしんじちゃえ。あー！ー！全員殺してやりや！」

校長先生の目の前で悪男君がカッターナイフを握り締めています。

校長先生は悪男君に誤った対応をしてしまったと焦りました。

悪男君は今にもナイフを突きつけて来そうな勢いです。

「悪男君！それはイカン。どうしても私が悪いならば私を切りなさい！」

「てめーしねー！」

校長先生のお腹にカッターナイフが刺さりました。

白いワイシャツが真っ赤になりました。

「俺は悪くない！俺は悪くない！てめーが悪いんだ！！しねしねしねー！」

校長先生のお腹は見る見る内に血まみれになっていきます。

校長先生は泣いていました。

「……んっ、痛い。痛いぞ、悪男君！先生は悲しくて仕方が無いよ！」

そして3分間刺され続けられた校長先生はその場に倒れました。悪男君はその時初めて正気に戻り、自分の過ちに気が付きました。20分後、学校の前には救急車とパトカーがやってきました。

次の日

校長先生は病院ですやすやと眠っています。

悪男君は補導されてカツ丼食べました。

学君はその事件を聞いて不幸だなと思いました。

友達君は相変わらず微笑んでいましたが自分を責め続けています。

哲君は今回の事件を忘れるためにまたどこかに遊びに行きました。

花子ちゃんは校長先生と悪男君のことに心を痛めて絵を描きました。

次の日、学校で緊急の全校朝会がありました。

教頭先生が険しい顔をして生徒達に説教しました。

「今回の様な事件が二度と起こらない様に思いやりの心を持って生活していきましょう」

しかし悪男君の彼女の悪子ちゃんにはその話を素直に聞けませんでした。

花子ちゃんの友達の素直ちゃんは素直にその話を最後まで聞いていました。

それを見ていた学君はまた幸せと不幸について考えてしまいました。全校朝会が終わります。

生徒がゾロゾロと体育館を後にしました。

ある女の先生はしくしくと泣いていました。

哲君は教室に戻るとまたワイワイしていました。

花子ちゃんは素直ちゃんと一緒に居ましたが、あまり話が弾みませんでした。

友達君が次の日から学校に来なくなりました。友達君の友達達はそれを少し気にしています。

哲君はそれでもワイワイしてました。

学君はそれをずっと見ていました。

そしてここにも不幸があると思いました。

学君は教室に戻ってから本を開いてみましたが、読む気が起きませんでした。

家に帰ってからテレビゲームをしました。

それでもちっとも面白くありませんでした。

夜、哲君たちと一緒に花火をしました。

哲君が輝いて見えました。

しかし花火の方が綺麗だと思いました。

次の日の次の日

校長先生はすっかり元気になりました。

「よく眠れたよ。おなかの痛みはまだ晴れないが、それより心の痛みが晴れない」

お見舞いに来た、この前全校朝会で泣いていたしくしく先生はそれを聞いて、またしくしく泣き始めました。付き添いできた教頭先生は、相変わらず険しい顔をしていました。

悪男君は自宅に一時的に返されました。

待っていた父親に木刀で殴られ、それを制止しようとしたときに左指が2本折れました。

母親と祖母はそれを黙って見ていました。

悪男君の中に再び殺意が芽生えました。

しかし悪男君はととてもとても寂しくて、涙を溢し声を荒げながら家を飛び出しました。

その晩は近所の駅の待合室で一夜を明かしました。

しかし一睡も出来ませんでした。

その夜、花子ちゃんは絵を描き終えました。

ぐったりしてしまいすぐに眠ってしまいました。

ベッドの脇の机には絵が置いてあります。

丸い黄色い花と血の色をした細い花がおうど色の大きな花瓶の中に生けられている絵でした。

友達君と悪男君と校長先生のことを想いながら描いた絵でした。

一方、悪男君の彼女の悪子ちゃんは、悪男君のことが心配で心配で仕方ありませんでした。

携帯電話で連絡しても、電波がつながりません。

悪男君の携帯は、事件を起した日から悪男君の机の脇にかけてある学生鞆の中に入ったままだったからです。

悪男君の携帯には悪子ちゃんからの着信履歴がすでに30件以上入っていました。

メールも4通入っていました。

しかしそれに気づかれぬままでした。

次の日、悪男君は学校に顔を出せませんでした。

悪子ちゃんは学校を飛び出し、悪男君を探し始めました。

哲君もそれに「協力するよ」と言ってくれました。

学君は花子ちゃんが元気がないことに気付きました。

素直ちゃんは今日もハッピースマイルです。

友達君の席は空席のままでした。

友達君の友達達はいじる相手が居なくてつまらなそうにしていた。

そろそろ中学最後の夏休みが始ろうとしていました。

夏休みのはじまり

中学最後の夏休みがやってきました。

生徒たちはみんな高校受験に向けて勉強を始めている様子です。

学君も頭にねじりはちまきをつけて、勉強を始めましたが学校のみんなのことが気になって仕方ありませんでした。

哲君はいつも遊んでいるようでしたが、やるときはやるという感じで凄い集中力で勉強する様子がありました。

悪男君は祖母の家に一時的に住むことになりましたが、高校のことなど全く頭にありません。

悪子ちゃん毎日毎日悪男君のことばかり思って、勉強に身が入りません。

憂鬱な花子ちゃんは美術部のある御花畑高校を受験することになりました。

素直ちゃんはニコニコスマイルで素直にエリート進学校を受験することになりました。

友達君は大学生であるメグたん先生が付き添い、家で受験勉強を始めました。

校長先生は、先生一同と最近の学内の様子についてみんなで話し合いをすることにしました。

「しくしく先生、どうだね？悪男君と友達君のことだが。」

「ええ…。私は友達君のことが気になって仕方が無いんです。彼はとても器の広い、情緒豊かな生徒です。ああ（お気楽に）見えてもいつもみんなのことで一杯なんです。友達君はみんなのことをいつもいつも受け止めている縁の下の力持ちなんですよ。」

教頭先生が険しい顔をしてうなずいていました。そして、校長先生は教頭先生にたずねました。

「教頭先生、あなたはどうかね？」

「私は悪男が許せん。あんなことをするなんて言語道断だ。あんな奴は少年院にでも入ったらいいんだ。みんなが平和に過ごせるように努力することのできる、友達君のような生徒が私は模範的な生徒だと思うんだが、少し氣にくわないことがあるくらいですぐにキレてしまう悪男は話にならん。」

いつもの教頭先生にしてはずいぶんと感情的な発言でした。

「私は悪男君の気持ちもわかりますよ……。」

音楽の授業を受け持つ教育実習に来ていたメグたん先生が真顔で言いました。

すると、教頭先生が人を疑う様な目でメグたん先生の顔を見て言いました。

「君は人の気持ちというものが分かっているのかっ!？」

「ええ。」

メグたん先生はその後何も発言しませんでした。他の先生方に動揺が走りました。

「うむ、まあよいではないか。僕もみんなの意見を聞きたいんだ。

鉄拳先生はどう思うのかね?」

「……。近頃はみんな自分のことばかりで、自分さえよければいいという様な風潮がどこにあるのではないか? 私は教師生活をもう25年送っているが、そんな風潮が保護者にも生徒にも蔓延している様な気がする。」

鉄拳先生は国語の先生で、サッカー部の顧問でしたが、何故か部活の練習中にも本をいつも片手に読みながら、てきとーに顧問をしているという一風変わった先生でした。

部活で練習する生徒にはいつも「自分の蹴りたいようにボールを蹴ろ。」と言っておりました。

校長先生が溜息をこぼしました。

「我々教師も反省が足りぬかもしれんな。」

「まあいいんじゃないですか、みなさん個人個人で反省されていると思いますけどね。」

英語のハワイ先生がそう言いました。先生たちの張りつめた空気が一瞬和らぎました。

そろそろ8月になろうとしていました。

ある花火大会の夜、悪男君は悪子ちゃんの家忍び込みました。

悪子ちゃんは家族に友達と花火を見に行くと嘘を言い、家族は別に花火を観に行っていました。

哲と学のお盆

哲君と学君は実はここでした。

哲君のおじいさんと、学君のおじいさんは同じおじいさんなのです。というわけで、今は亡きおじいさんの実家にお墓参りに行きました。そこにはなむじいというおじいさんの弟さんが居ましたが、外出中でマツエおばさんが迎えてくれました。

「おやまあ、哲君と学君じゃないの……。今日はお墓参りに来てくれたの？二人とも偉いねえ。」

「はいっ！学と来ましたよ、イエーイ！」

「……こんにちは。」

「まあ元気なことね。さっさ、あがってカルピスでも飲む??」

マツエおばさんは居間に招いてくれました。

「うひょー！カルピス旨そうー！」

「……」

「学君、ちょっと元気ないんじゃないの？何かあったの？」

横で哲君が嬉しそうにカルピスをがぶがぶ飲んでいます。

「うーん……。いえ、特に何もありませんが。」

「あらそう。今日ね、なむじいは外出しちゃってるの。多分、お寺の住職さんといま話していると思うんだけど、お墓参りのついでに住職さんの所に行つてくるといいわ。なむじいも今日は哲君と学君が来ることを楽しみにしてたわよ。」

「ほんとにーっ！ー！楽しみだあー！」

哲君はとても嬉しそうでした。

「……。マツエさん、お線香の火、付けるもの忘れてしまいました。ライターを貸してもらえないでしょうか？」

「まあ、はいじゃいやって。ライターね、はいこれ貸してあげる。気を付けて使つてね。」

「はいー！行つてきまーす！ー！」

「…ありがとうございます。」

こうして、哲君と学君はなむじいの居るお寺に向かいました。

寺に着いてからまずお墓に線香をあげました。すると哲君が一生懸命、お墓の石を磨きはじめました。学君は気が重くて石を磨く気にもなれません。

「おい！学、水かけようぜ！じゃーじゃー♪じゃーじゃー♪…」

哲君がお墓を洗う歌を歌い始めました。

しばらくして、哲君と学君はなむじいのいる本堂の脇の社務所兼住職さんのお家へ行きました。

住職さんとなむじいは何やら中の和室でお茶を飲みながら難しい話をずっとしています。

しかし、哲君と学君に気付くなりすぐにやってきてくれました。

「おお、哲と学じゃないか。こんにちは。」

哲君が久々に緊張してます。学君はいつもと変わりません。

「こんにちは！！！」

「…こんにちは。」

「…。二人とも住職さんとお茶を飲むか？」

学君が哲君の顔を見て、どうする？という顔をしています。しかし哲君はこう言いました。

「はい、お邪魔します。」

和室に二人は通され、住職さんとなむじいと一緒にお茶を飲むことになりました。

「なむさんの孫かね？まあなんとなむさんの若い頃に似ておるの
お。」

「はっはっはっ…。哲と学を足して二で割ったような感じだったか
のお。」

その後、お茶を飲みながら幸せについてなむじいが語り始めました。
「…この世とあの世というものはあべこべなの。この世で“ない”
ということ人を経験して、心の中でそれが“ある”ということを

悟る。また同時に心の中に“ない”ということをして人は経験し、この世で“ある”ということを求める。前者を愛、後者を恋というのだよ。そして心の中こそがあの世と繋がっている。愛はその深淵、いや頂点にあるもので人には掴みえぬ霧のようなもののな。」

「なむじい、全然わからなくい！！俺は遊んでるのが一番だっつ！！」

学君はあることに気付きました。

「…もしかしてあの本、なむじいさんが書いたんですか？」

「…そうだよ。」

学君が読んでいた『不幸の克服』という本はなむじいが書いたものだったのです。

「俺はいつも楽しいよ。世界にはいっぱいおっぱい愛があるからね。」

すると住職さんがうなづきました。

「ほおっほおっ…。それにしても哲君は威勢が良いのお。それも良からう。学びたい者は学ぶがよい。遊びたい者は遊ぶがよい。ただ、幸せは見せびらかすものではないということじゃ。かといって不幸を装えと言っておるわけではない。色々と、そこら辺が難しいのじやよ。」

するとなむじいは苦い顔をして呟きました。

「…この世は何と住みにくいことか。」

哲君の視界には全くなむじいのその顔が入っていませんでした。

しかし学君の目にはくつきりとその苦い顔が見えました。

哲と学のお盆（後書き）

適当に書いてしまいました。最近いつもの調子が出ません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1420g/>

哲と学の幸せ問答

2011年1月6日02時44分発行